

北海道の狩猟・漁撈活動の変遷

西 本 豊 弘

-
- | | |
|--------------|--------------|
| はじめに | e 海獣狩猟 |
| 1. 資料について | f 農 耕 |
| a オホーツク文化 | 3. 時代毎の生業の特徴 |
| b 擦文文化 | a 縄文時代 |
| c 中・近世の遺跡 | b 続縄文時代 |
| 2. 生業の種類毎の変遷 | c オホーツク文化 |
| a 採 集 | d 擦文文化 |
| b 川でのサケ漁 | e 中・近世 |
| c 海での漁撈活動 | 4. まとめ |
| d エゾシカ狩猟 | おわりに |
-

はじめに

北海道では、旧石器時代以降近代に至るまで、自然の産物を対象とした狩猟・漁撈・採集活動が主要な生業として行われていた。本州が縄文文化から弥生文化に移行し、農耕や家畜を受け入れて以来、北海道においても農耕や家畜飼育が行われた時期があったであろう。しかし、それらは明治政府による開拓が始まるまで、主要な生業とは成り得なかったことはほぼ間違いあるまい。北海道で近代に至るまで、農耕と家畜飼育が十分に行えなかった理由は、寒さを主とした気候条件によるところが大きいが、また一方では政治・社会的要因もあったであろう。いずれにせよ、本州で農耕経済が行われている間、北海道では農耕文化を知りつつ狩猟・漁撈活動が主要な生業であったわけであり、狩猟・漁撈社会と農耕社会との関連を考える上で、北海道の生業の変遷は大変興味深い問題を含んでいるといえる。すなわち、本州の西半部で100年ないしは200年の間に行われた縄文文化から弥生文化への移行が、北海道ではその10倍ないしは20倍の時間の長さの中で行われたと仮定することができるのである。もちろん、縄文文化から弥生文化へのプロセスのすべてが北海道内で同様に起こったと言うわけではない。一般的な意味で、異なった生業体系を持つ社会の接触を考える時、北

1. 資料について

海道における生業活動の変遷はそのひとつの例と成り得ると思われるのである。本論では、このような視点に立って考察を進めてみようと思う。

なお、筆者は、以前に北海道の縄文・続縄文時代の生業活動について、シカ猟・サケ漁とともに海獣狩猟も主要な伝統的生業として考えるべきであるという主旨で述べたことがある⁽¹⁾。本論はその続編というべきものであって、前論文で扱った時代よりも後の生業活動を主に論じようとするものである。そこで、本論では、オホーツク文化・擦文文化以降の遺跡から出土した動物遺存体を提示し、それらの資料について若干の考察を加える。そして次に、前論文の資料と合わせて、縄文時代以降の北海道の主要な生業活動の変遷を検討し、時代毎の生業活動の特徴を簡単にまとめようと思う。

1. 資料について

続縄文時代よりも後の時代の動物遺存体の出土例を、表1に示した。これらの資料は直良信夫・金子浩昌及び筆者が種名と出土量を分類したものを中心に集成した。これらの他に未分類の資料や未報告のものもかなりあるが、一応現在の時点で公表できるものを示した。

なお、本来は各時代毎に記載すべきであるが、オホーツク文化と擦文文化は併存している期間があり、オホーツク文化・擦文文化という名称を用いた。また、擦文文化の後の時代については、一般にアイヌ文化期とも言われているが、この名称を用いた場合、「アイヌ文化」がこの時代に形成されたと筆者が考えているように受け取られかねない。それで、この時期については、これも適当ではないが、本州と共通の一般的時期区分として、「中世・近世」という名称を暫定的に用いることとした。文化名と時期名を混用することとなり不統一で残念であり、北海道の中・近世の時代の文化内容についての考古学的研究が不十分であると同時に、この時代の考古学的研究の困難さを痛感している次第である。以下、各文化毎の出土遺物の内容について、簡単に述べることにする。

a. オホーツク文化

オホーツク文化の遺跡出土の動物遺存体は、大きく2群に分けて考えねばならない。第1は、堅穴内に意図的に集積されている遺物である。第2は、香深井A遺跡の魚骨層やオンネモト遺跡の貝塚出土例のように無差別に捨てられた遺物である。前者

は無意識に廃棄された遺物も含まれる場合もあるが、大部分は骨塚と呼ばれるものであり、儀礼的な意味を持っている。後者についても、まったく儀礼的な意味がなかったとは言えないが、前者とは何らかの区分がされていたと考えられ、我々がそれらを取り扱う場合でも区別すべきであると考えている。もちろん後者の包含層の中に儀礼的遺構と遺物が出土する場合がある。しかし、少しでも獣骨がまとめて出土すると儀礼的であると考えがちであるが、オホーツク文化の場合には、儀礼的なものと儀礼が終ったもの、または非儀礼的なものは、かなりはっきりと分けられていたように思われる。

さて、骨塚出土の動物遺存体は、金子浩昌氏がまとめられているように⁽²⁾、ヒグマの頭蓋を主体とするもの、それにエゾシカやオットセイの頭蓋が加わるもの、それらの四肢骨を主体とするもの、キツネ・タヌキ・テンなどの頭蓋を主体とするもの等、かなりバラエティーが認められるが、主体はヒグマの頭蓋である。このような遺物は、食料として利用されたものの一部分が集積されているのであるが、骨塚出土の資料が当時の生業活動を正確に反映しているとは思えない。もちろん、ヒグマが捕獲された場合には、その肉はかなりの量になり、食料として貴重なものであったと思われる。しかしながら、ヒグマは周年獲れるものではなく、また、個体数もそれほど多いものではない。したがって、オホーツク文化では、ヒグマは食料としての意味を持っていたとしても、それ以上に、従来言われているように儀礼的な意味を持った動物として捕獲されていたと思われる。

第2群の魚骨層や貝塚出土のものについては、これまでに筆者が別の機会で述べてきたように、生業活動をかなり反映したものと思われる。その内容は、貝類・ウニ類・魚類・鳥類・哺乳類のすべてにわたって、オホーツク海沿岸で捕れるものを最大限に利用しているように思われる。ただし、サケ類については道北部ではあまり出土していない。道東部では少量ずつではあるがサケが出土しており、おそらく河口部でかなり捕獲していたものと思われる。標津町のカリカリウス遺跡では、擦文文化との接触を示す土器を出土する竪穴の床面から、サケの焼骨が多量に出土しており、オホーツク文化の末期の道東部では、オホーツク文化人の擦文文化人への同化と生業形態の変化が起こっていたように思われる。

b. 擦文文化

擦文文化の竪穴住居跡は多く発掘されているが、動物遺存体は青苗貝塚や小幌洞穴A地点等を除いてほとんど知られていなかった。これは擦文文化の遺跡が河川沿いで

1. 資料について

表1 遺跡出土の主要動物遺存体

遺跡	種名 時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
		クロアワビ	ヒメゾボラ	イガイ類	ホタテガイ	マガキ	ウバガイ	ウチムラサキガイ	ハマグリ	コタマガイ	ビノスガイ	ヤマトシジミ	カワシンジュガイ	ウニ類	サメ・エイ類	サケイ類	ウグイ類	メカジキ	マグロ類	ホッケ類	カサゴ類	マダラ類	カジカ	ヒラメ	
1. 香深井 A 遺跡	オホーツク文化	○	○	+	+	+								◎	○	+	◎		+	◎	◎	◎	◎	+	○
2. 亦稚貝塚	〃	+	+	+	+	+		+			+			◎	+	+	◎	+	+	◎	◎	◎	+	+	+
3. オンコロマナイ貝塚	〃	+	+	+	+	+				+	+			◎	+	+	+	○	+		○	+	+	+	+
4. 富磯貝塚	〃	+		+	+	+								+											
5. 栄遺跡	〃																								
6. 栄浦第2遺跡	〃				+	+	+			+	+	+			+	+	+	?					+	+	
7. トコロチャシ遺跡	〃			+	+					+	+				+	+	+		+	+	+	+	+	+	+
8. 能取西岸遺跡	〃														+	+							+	+	
9. ニッ岩遺跡	〃														+	+	+	+							
10. モヨロ貝塚	〃	+	+	+	+	+				+	+			+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+
11. ウトロ海岸砂丘遺跡	〃																								
12. トビニタイ遺跡	〃																								+
13. 合泊遺跡	〃														+										
14. 松法川北岸遺跡	〃																								
15. 弁天島遺跡	〃				+	+										+									
16. トーサムボロ遺跡	〃	+	+	+										+	+	+									
17. オンネモト遺跡	〃	+	+	+	+									+	+	○		+		+	○	○	○	+	
18. ウエンナイ2遺跡	擦文文化	○												+											
19. 須藤遺跡	〃				+					+	+				+										
20. カリカリウス遺跡	オホーツク~擦文文化														◎	+	+								
21. 開成4遺跡	擦文文化(北大式期)						+				+														
22. 北大構内遺跡	擦文文化														◎										
23. 錦町5遺跡	〃														+										
24. 小平高砂遺跡	〃										+						+								
25. 青苗貝塚	〃	+		+	+	+				+				+											
26. 小幌洞穴A地点	〃																		+	+		+	+	+	+
27. 勝山館跡遺跡	中・近世	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			+	+	+	◎	○		+	+	+	+	+	+
28. 瀬田内チャシ跡遺跡	〃	◎	○	○	+	+	+	+	+	○	○	○		+	+	○	○	○		○	○				
29. 神恵内洞穴	〃	+	+	+																					
30. ヌッチ川遺跡	〃	◎	+	+	+	+	+	+	+	+															
31. 天内山遺跡	〃	◎	○	+	+	+	+	+	+	+					+	◎	+		+	+	+	+	+	+	+
32. 桃内遺跡	〃	◎	+	○	+	+								+	+	○	?		+	+					
33. ライトコロ川口遺跡	〃				+	○	+								+	+	+				○	+	+	+	+
34. タンネウシ貝塚	〃				+	+				+	+				+								+	+	+
35. 遠矢第2チャシ跡遺跡	〃			?	+	+	○			+	+				+	+	○		+	○					
36. 遠矢8遺跡	〃					+				+	+				+	+									
37. ノトロ岬遺跡	〃					+									+	+									
38. シノタイA遺跡	〃				+	+	+											+							
39. 仙台藩陣屋跡遺跡	近世末				+			+																	+
40. 津軽陣屋跡	〃																								

注 ◎：多量，○：少量，+：ごく少量，なお，この表に示したものは主要なものであり 全出土種を示してはいない。

1. 資料について

多く発見されていることや貝塚がほとんど形成されていないことと関連している。近年になって、擦文文化の堅穴の覆土や床面の土壌、炉やかまどの灰や焼土が採集されて水洗・分類が行われるようになり、サケの焼骨が検出されるようになった。現在のところ、サケの骨が大部分であり、他の魚は極く少量である。また、鳥獣骨もほとんど含まれていない。

海岸部の遺跡では、青苗貝塚と小幌洞穴が知られており、いずれも動物遺存体がかかり出土している。青苗貝塚は近年再発掘されたが報告書は未刊である。以前の発掘資料によると、多くの貝種の他、ニッポンアシカの頭蓋が7個、まとまって発見されている。しかも、それらの後頭部には穴があげられており、儀礼が行われたことは明らかである。また、小幌洞穴A地点は、報告書刊行時には未分類であった資料を分類した結果、オットセイの幼獣が多いことが判明した。その出土状況からみて、おそらく、それらのオットセイは洞穴内に儀礼的な意味を持って集積されていたと思われる。青苗貝塚と小幌洞穴A地点の例からみて、擦文文化においても海岸部で狩猟・漁撈活動を行っていた人々があり、また、動物儀礼も行われていたことが認められたと言える。

c. 中・近世の遺跡

この時期の遺跡では、擦文文化で減少していた動物遺存体の出土が、量的にも種類の上でも増加する。縄文・続縄文時代とほぼ同じような狩猟・漁撈活動を思わせるが、動物遺存体の内容を見ると、縄文・続縄文文化とはかなり異なっている。すなわち、日本海沿岸の遺跡ではアワビが多くなり、また、全道的な傾向として鳥類の捕獲があまり積極的ではなく、一方、ヒグマの出土量が多くなる。

もうひとつの特徴として、館やチャン、堅穴内堆積物や貝塚というように、遺跡の性格にバラエティーがあり、和人との関連を考えずには語れないことである。たとえば、縄文・続縄文時代では本州からイノシシを持ち込んでいたが、これは埋葬儀礼に供された可能性があったとしても、主に食用のために本州から北海道に持ち込まれたものと思われる。それに対して、中・近世では、勝山館で出土した家畜は、従来から飼われていたイヌを別とすればウマとネコであり、ウマは乗馬用・ネコは愛玩用が主目的で、和人により飼われていたと思われる。

また、魚類の中でこの時期によく出土するのはメカジキであり、道南・日高・道東の太平洋岸の遺跡で見られる。



図1 動物遺存体出土の主要遺跡

- | | | |
|---------------|---------------|----------------|
| 1. 香深井A遺跡 | 15. 弁天島遺跡 | 29. 神恵内洞穴 |
| 2. 亦稚貝塚 | 16. トーサムボロ遺跡 | 30. ヌツチ川遺跡 |
| 3. オンコロマナイ貝塚 | 17. オンネモト遺跡 | 31. 天内山遺跡 |
| 4. 富磯貝塚 | 18. ウエンナイ2遺跡 | 32. 桃内遺跡 |
| 5. 栄遺跡 | 19. 須藤遺跡 | 33. ライトコロ川口遺跡 |
| 6. 栄浦第2遺跡 | 20. カリカリウス遺跡 | 34. タンネウシ貝塚 |
| 7. トコロチャシ遺跡 | 21. 開成4遺跡 | 35. 遠矢第2チヤシ跡遺跡 |
| 8. 能取西岸遺跡 | 22. 北大構内遺跡 | 36. 遠矢8遺跡 |
| 9. ニツ岩遺跡 | 23. 錦町5遺跡 | 37. ノトロ岬遺跡 |
| 10. モヨロ貝塚 | 24. 小平高砂遺跡 | 38. シノタイA遺跡 |
| 11. ウトロ海岸砂丘遺跡 | 25. 青苗貝塚 | 39. 仙台藩陣屋跡遺跡 |
| 12. トビニタイ遺跡 | 26. 小幌洞穴A地点 | 40. 津軽陣屋遺跡 |
| 13. 合泊遺跡 | 27. 勝山館跡遺跡 | |
| 14. 松法川北岸遺跡 | 28. 瀬田内チヤシ跡遺跡 | |

2. 生業の種類毎の変遷

ここでは、縄文時代から近世まで北海道で行われた生業活動について、その主要なもの毎に、時代的变化を追ってみようと思う。主要な生業として、採集、川のサケ漁、

2. 生業の種類毎の変遷

海での漁業，エゾシカ・ヒグマ狩猟，海獣狩猟及び農耕を取り上げることとする。

a. 採集

生業活動の中で「採集」は最も基本的なものである。北海道の縄文時代から近世に至るまで、おそらくその重要性は変わっていなかったであろう。近・現代アイヌによる採集活動をみると、春のアハ（土まめ）・トマ（エゾエンゴサクの根）・キト（ギョウジャニンニク）等から夏のトゥレプ（ウバユリ），秋のニセウ（ドングリ）・ペカンペ（ヒシの実）・ニム（クルミ）まで山野の植物質食料は可能な限り利用していた。海岸での採集も，ウニや貝類はもちろん海草類も近代に至るまで海岸部に居住した人々にとって常に利用されてきた。

この採集活動の時間的変化として考えられるのは，人口の増加，特に本州からの和人の移住とそれに伴う一地点への居住の集中化によって採集対象物の枯渇の問題である。この問題は考古学的資料によって具体的に論じることはできない問題であるが，家族ないしは個人レベルの生活においては，採集活動は食料確保にとってかなり大きな意味を持っていたと思われる。人口増加または長期間の居住による居住地周辺での植物質食料の減少は，縄文・続縄文時代までは，おそらく，当時居住していた地理的条件の場とほぼ同一の地理的条件の地点への移住がそれ以降の時代よりも容易であったであろう。しかしながら，擦文文化以降は，おそらく和人との接触の程度がそれ以前よりも深くなり，土地に対する和人の価値観が浸透するにつれて，続縄文時代以前とは異なった「居住地への規制」が北海道内に居住した人々の間に広がって行ったのではなかろうか。すなわち，擦文文化を境に徐々に土地私有の観念が影響を及ぼし始め，北海道において土地への価値観が変化し始めたのではないかと想像しているのである。

b. 川でのサケ漁

サケの骨は残りにくいと言われていたし，また，遺跡から出土する例は，以前はほとんど知られていなかった。しかし，近年は東北地方でも北海道でもサケの骨はよく知られるようになった。私が分類に関わった限りでは，ある程度の量の魚骨が採集されている遺跡では，ほぼ例外なくサケの骨が含まれていた。それは，縄文・続縄文時代から近世に至るまで，どの時代の遺跡においても同様であった。特に最近では擦文文化の竪穴住居址からもよく出土するようになった。竪穴の床面の土壌や，炉やかまどの焼土・灰を採集し，分類するようになったからである。以前の発掘でもおそらくサケの骨は出土していたであろう。それを採集しようとしたか否かが問題であったと

思われる。

さて、このようにサケの骨が含まれる遺跡が多くなったのであるが、サケは食料としてどのくらいの比重を占めていたのであろうか。確かに擦文文化の堅穴床面にはサケの骨が多く残されていた。しかもサケ以外の魚骨はごくわずかである。では、擦文文化人は、サケばかり食べていたのであろうか。考古学上の遺物からみる限りは擦文文化人の食料の中でサケは主食のように思われる。そして、おそらく、擦文文化人の遺跡の立地がサケの産卵場を中心とするサケ漁の都合の良い場所を選んでいたら可能性も十分考えられる。

ところで、川に遡上し、産卵場附近まで来たサケを獲ることは、漁というよりも採集活動に近い。また、捕獲地点が産卵場附近という場所に制約される点でも採集活動に近い。このような点から言えば、川でのサケ漁そのものは地理的な場所と密着した生業活動というべきで、堅穴住居の立地とサケ漁の場所との関連を再検討する必要がある。たとえばサケを獲る場所が決まっているとすれば、その近くに堅穴を築いて居住する必要があるのかどうかである。筆者には、擦文文化人がサケのみを主食にしていたとは思われないし、サケ漁のみを目的として河川上・中流域にまで居住したとは思われない。もちろん、サケは縄文時代から近世まで北海道においては主食の中のひとつであったと思うが、それは多くの主食の中のひとつであったと考えている。サケの評価については、筆者もまだ確信を持ってはいないが、縄文時代から近世までの遺跡の動物遺存体を検討してみると、これまで言われてきたように、北海道ではサケとエゾシカが主食であったという意見は、サケを過大評価していたように思われるのである。なお、擦文文化のサケについては次章で改めて述べることにする。

c. 海での漁撈活動

ここでは海獣狩猟を除く海での漁撈活動をみてみようと思う。北海道近海は漁業資源が非常に豊かである。温帯や熱帯の水圏と比べて魚種のバラエティーは少ないが、単一の魚種の個体数が多いという点で亜寒帯水圏の魚類の豊富さを背景としているのである。問題は、どの程度まで、その豊さを利用できるかである。たとえば、ニシンについては、春の産卵期に岸近くに接岸するので、縄文時代から現代に至るまで利用されている。その他の魚種では、スズキ・メナダ(ボラ的一种)・マグロ・ウグイなどがよく出土しており、スズキは江別太遺跡では夏に遡上する大きな個体が捕られている。ウグイは、フレベツ遺跡群の美沢4遺跡では、小さな範囲を囲ってその中の小魚を一網打尽にするような方法で捕られていたと推測されている。また、メナダ・マグ

2. 生業の種類毎の変遷

口は水面近くを群泳する種である。このようにみても縄文・続縄文時代では、海岸のごく岸近くでの捕獲か、水面近くの目に見える範囲の魚を主に対象としていたように思われる。もちろん、釣針が出土しており、水面下深い場所に生息する魚類も捕獲していたことは間違いないが、その量が問題である。

さて、北海道の漁撈活動の中で、ひとつの時期を画するのは、オホーツク文化である。オホーツク文化の漁撈活動は、ニシン・ホッケ・マダラ・カサゴ類・カレイ類を主な対象としているが、その特徴は、大量に魚を捕獲していることである。魚類の大量捕獲には網の使用と船の耐航性の増加が推測される。そして、ホッケやマダラが縄文・続縄文時代よりも多いことから、それらの時代よりも若干岸から離れた水深の深い場所での漁業活動が行われていたと思われる。しかしながら、ホッケ・マダラにしても接岸する産卵群を主な対象としていたらしく、オホーツク文化においても沿岸性の漁撈活動であった。しかし、このようなオホーツク文化での漁撈技術は、道北海岸部での人間の居住を安定化させ、擦文文化を経て近世のアイヌの人々にも受け継がれたものと思われる。

漁撈活動の中で、最も新しく加わったものは日高海岸を中心とした太平洋岸で行われたメカジキ漁である。シノタイA遺跡ではメカジキが大量に捕獲され、メカジキの吻部が砂浜に突きたてられていた。このようなメカジキ漁の伝統は現代までアイヌの人々に受け継がれている。このメカジキ漁は、海獣狩猟と何らかの関連があると思われるが、いつ頃から行われるようになったか明らかではない。縄文時代でもカジキ類は出土しているが、その当時、積極的にカジキ漁が行われたかどうかは、舟の安定性からみて疑わしい。少なくとも近世にメカジキ漁が行われていたことは明らかであり、場合によっては擦文文化まで遡り得るかもしれないと考えている。

d. エゾシカ狩猟

北海道の遺跡では、縄文時代から近世まで内陸河川沿いの遺跡であれ、また海岸部の遺跡であれ、エゾシカは常に重要な食料資源のひとつであった。また、角や四肢骨は利器の材料の主体を成すものであった。オホーツク文化の遺跡では香深井A遺跡のように骨のごく少量しか出土しない場合があるが、鹿角は利器の材料として利用されていた。

このように、北海道ではエゾシカがいつの時代でも陸獣狩猟の主な対象のひとつであったが、エゾシカのみが主要な食料となったことはないであろう。エゾシカは明治11年の大雪でその生息数が激減したことが知られており、そのような現象が過去にな

かったとは言えない。また、近世以前には北海道にはエゾオオカミが生息しており、現在のように、エゾシカの天敵がイヌと人間だけの状態ではない。したがって、エゾシカが、明治以前には常に多くの生息数を維持していたと考えるのは危険である。その点から言えば、エゾシカの生息していた地域ではエゾシカは主要な食料源のひとつであったとしても、それは多くの食料源の一員という意味においてであったと思われる。

e. 海獣狩猟

北海道沿岸にはオットセイ・ニッポンアシカ・トド・アザラシ類・イルカ類・クジラ類が多く分布しており、それらを主な対象とした海獣狩猟は縄文・続縄文時代の主要な生業のひとつであった。この点についてはすでに述べたことがあり⁽³⁾、また、オホーツク文化で、海獣狩猟が盛んであったこともよく知られている。擦文文化以降においても北海道近海に海獣類やクジラ類が多く分布することは、縄文時代と同様に変わりなく、擦文文化の時代以降も北海道各地で海獣狩猟が行われていた。そこで、ここでは、縄文時代以降近世に至るまでの海獣狩猟の推移を簡単に述べてみたいと思う。

縄文時代に海獣狩猟が盛んに行われたのは、東釧路貝塚や朝日トコロ貝塚に知られるように道東部の太平洋岸とオホーツク海岸、礼文島船泊砂丘遺跡のある道北部、及び北黄金貝塚や入江貝塚の立地する道南部内浦湾沿岸である。道北部では、船泊砂丘遺跡はトドを主に捕獲していたが、このトドは樺太から南下したものの他に、船泊湾沖にあるトド島に繁殖群が生息していた可能性があり、この群を主な対象としたとも考えられる。この遺跡では離岸性のオットセイは出土しておらず、沿岸性のトドとニッポンアシカが海獣狩猟の主な対象であった。ところが、オホーツク文化になると、香深井A遺跡をはじめとして礼文島・利尻島及び稚内近辺の遺跡ではオットセイ狩猟が主体になる。船泊湾内の浜中遺跡でもオットセイやイルカ類・クジラ類がトドとともに多く出土するようになり、オホーツク文化では縄文時代よりもさらに海獣狩猟が盛んになり、狩猟技術も発達したものと思われる。この道北部では、オホーツク文化の消滅以降、海獣狩猟がどの程度行われたかは分らない。現代でもこの利尻・礼文島近海はオットセイの回遊コース上にあり、また、樺太からトドが多く南下してきている。この地域で擦文文化以降海獣がまったく捕獲されていないとは考えられず、おそらく近世に至るまで、海獣狩猟が行われていたと思われる。なお、オホーツク文化では、カマイルカやイシイルカ・ゴンドウクジラ等の小型の歯クジラ類の他に、ザトウクジ

2. 生業の種類毎の変遷

ラヤセミクジラ等の大型のヒゲクジラまで意図的に捕獲されていた可能性が強い。この大型クジラ猟は、内浦湾アイヌの捕鯨の記載からみて⁽⁴⁾、オホーツク文化の後の時代には行われなかったかもしれない。

道東部では、東釧路貝塚でネズミイルカ猟が積極的に行われ、イルカの頭蓋が円形に並べられた遺構も出土し、イルカに対する儀礼が行われていた。ここではオットセイ猟も行われていた。オホーツク海沿岸の大曲洞穴や朝日トコロ貝塚では、回游性のオットセイの他に、アザラシ類も多く捕えられていた。道東部近海は北海道の中でも魚類資源の最も豊富な海域のひとつであり、したがって、魚類を餌とする海獣類も多い。近世の遺跡である斜里町タンネウシ貝塚や遠矢第2チャシ跡でもオットセイが出土しており、また、斜里アイヌではアザラシ猟が近世でも盛んに行われたことが知られている。この地域では縄文時代以降、続縄文時代、オホーツク文化、擦文文化を経て近世に至るまで、海獣狩猟は重要な生業のひとつであったと思われる。

内浦湾での海獣狩猟は、縄文・続縄文時代では最も重要な生業であった。北黄金貝塚A'地点、入江貝塚、南有珠6遺跡のオットセイの出土内容をみると、当歳から1歳前後の幼獣が多い。この内容は擦文文化の小幌洞穴A地点出土の資料でも同様である⁽⁵⁾。これらのオットセイは、越冬のために内浦湾に回游するもので、現在でも幼・若獣と雌の成獣が主体のグループである。特に内浦湾は外海に比べて波静かであり、幼獣の越冬地として適していると思われる。江戸時代の内浦湾でのアイヌのオットセイ猟もこの越冬群を対象としたものであった。犬飼哲夫・森樊須両氏の研究によると、内浦湾でアイヌが獲るオットセイは、松前藩への献上品の主要なもののひとつであった⁽⁶⁾。

また、イルカ・クジラ狩猟については、入江貝塚をはじめとして内浦湾岸の縄文・続縄文文化の遺跡からイルカの遺骨が多量に出土しており、この地域でイルカ狩猟が盛んに行われていたことが分る。また、内浦湾や白老アイヌでは明治時代まで捕鯨が行われていた。その記録によると、アイヌは大型のヒゲクジラやシャチは捕獲しないが小型のクジラはかなり積極的に捕っていたことがうかがえる。このように、道南部の内浦湾沿岸では、縄文時代以降近世に至るまで、オットセイやイルカ・クジラを対象とした海獣狩猟の伝統が維持されてきたのである。

f. 農耕

ここで、本論の主旨とははずれるが、生業活動のひとつとして、北海道における農耕の問題に簡単に触れておきたい。林善茂氏によると⁽⁷⁾、文献上アイヌの農耕が確認

されるのは1620年であって、1356年の『諏訪大明神絵詞』でも農耕の存在が暗示されているという。江戸時代の文献にはアイヌが粟・稗等を作っているという記載が多くみられる。考古学的資料としては、山田吾郎氏によると、縄文時代から栽培された穀物が出土し、続縄文・擦文文化ではさらにその出土例が増すという⁽⁸⁾。縄文時代の例はソバの種子と花粉が計3遺跡から出土しているが、出土遺跡数が少なく、積極的に雑穀栽培が行われていたとは今のところ言いがたい。続縄文時代に入るとソバの花粉の出土例も多くなり、アサやゴボウも出土し、続縄文文化人は農産物を知っていたと思われる。擦文文化期では、その年代差がかなりあるかもしれないが、ほぼ全道からソバ・アワ・キビ・モロコシ・オオムギ・小豆・緑豆・シソなどが出土し、北大構内のサクシュコトニ遺跡ではコメも出土している。したがって、擦文文化人が米を含む農産物を利用していたことは明らかであるが、次に問題となるのは、その農産物の利用の程度である。擦文文化における農耕については、狩猟・漁撈・採集活動が主要なもので、農耕は付随的なものとする立場と、農耕を積極的に評価しようという立場がある。筆者も、吉崎昌一氏⁽⁹⁾と同様に、カマドをもつ堅穴住居址の普及からみて、擦文文化においては、農産物の利用の程度はかなり高かったのではと考えている。そして、さらに、擦文文化そのものよりも、むしろ続縄文時代の後半に本州の農耕技術が北海道南部から道央部に強い影響を与えたのではないかと考えており、その点では山田吾郎氏や林善茂氏の意見に賛成であり、また、加藤晋平氏⁽¹⁰⁾と同様に、擦文文化の全道的な分布は、その前に農耕文化の伝播がなくては理解できないと考えている。ただし、筆者は、農耕と農産物の利用は区分すべきであると考えている。続縄文時代や擦文文化期には農耕技術が本州より入ったとしても、北海道の各地で農耕が順調に行われたかは疑問である。しかし、以下に述べるように、動物遺存体の分析からみれば、農産物、特に穀類の利用は続縄文文化の後半以降はかなり積極的に行われたのではなかろうかと考えているのである。

3. 時代毎の生業の特徴

ここでは、北海道の縄文時代から近世に至るまでの各時代・各文化毎の生業活動の特徴について、簡単にまとめてみたいと思う。なお、縄文・続縄文時代の遺跡毎の出土動物遺存体の内容はすでに提示しており、詳細についてはその文献を参照願いたい⁽¹¹⁾。

3. 時代毎の生業の特徴

a. 縄文時代

この時代の生業活動の基本的性格は、本州の縄文時代と変わらない。すなわち、その特徴は、自分達のまわりにある食料資源をすべて有効に利用しようという姿勢である。したがって、植物質食料と動物質食料の区別なく、その地域の産物を、自分達の技術水準に応じて利用できるものを主要な食料としたと考えられる。そのために、北海道内の様々な自然環境や立地条件に対応して、生業活動の主体が各地域毎に異なっていたと思われる。海岸部では、魚類や海獣類の捕獲、貝類・ウニ類の採取をはじめ、エゾシカの捕獲や植物質食料の採集など、生業活動が非常に多様であった。内陸河川沿いに居住した人々にとっては、海の資源が十分に利用できない分だけ海岸部の人々より多様性が減少するが、植物質食料や陸獣、河川のサケ・マス類やウグイ類の魚類を利用し、その地域で可能な限り手に入る食料を利用していたものと推測される。植物質食料の栽培を示す資料はまったく出土していないが、野生植物は重要な食料源のひとつであったと思われる。

b. 続縄文時代

続縄文時代の前半、すなわち恵山式土器が使用された頃までは、縄文時代と同様の生業活動が行われ、その基本姿勢は、その地域の利用できるものはすべて利用するという姿勢であったと思われる。もちろん、縄文時代との違いも若干みられる。恵山文化では、魚形石器やL字形釣針の発達・銚先の発達に示されるように、漁撈文化的性格がさらに強くなり、技術的にも縄文時代より少し発達していたように思われる。これは弥生文化の影響によるかもしれない。

問題は、恵山式土器使用の後の時期であって、恵山文化でみられた漁撈文化的性格が、貝塚の形成がほとんどみられなくなることに示されるように、急激に不明確になってしまう。この現象は、恵山文化の内在的要因のみからは理解しにくく、対外的要因、すなわち本州の農耕文化の影響を考えざるを得ない。これは、土器形式の編年の問題ともかわかり、十分な資料もなく軽率に論ずることはできないが、恵山文化の後半に本州の農耕文化、おそらく弥生文化段階のものが北海道南部に、強い影響を与えたように、生業活動の上からは推測される。この影響が具体的にどのようなものであったかは今後の研究に待たねばならないが、北海道南部を中心に、おそらく本州からの人間の移住と食物としての穀物の大量導入と、それに伴う交易活動の活発化が起きていたのではなかろうか。

なお、北海道南部を除いた地域の後北式土器群の分布した地域の生業活動については、はっきりとは分らない。この地域でも前半の時期は、縄文時代とほぼ同様の生業活動であったと思われる。しかし、この型式の土器が全道的に斉一性をもって分布し、また、東北地方まで分布する後北C・D式期頃は、ほぼ恵山文化の後半からそれ以降に相当することと、それらの東北地方への分布から考えても、東北地方の弥生文化または古墳文化の強い影響を受けていた可能性は高いと思われる。いずれにせよ、農耕の項で述べたように、動物遺存体の出土の仕方からみて続縄文時代の後半の時期に、本州の農耕文化の強い影響があったと解釈せざるを得ないのである⁽¹²⁾。

c. オホーツク文化の生業

オホーツク文化の生業についてはすでに別の機会に述べたことがある⁽¹³⁾。そこで、ここでは北海道全体の生業の推移の中で重要なことを簡単にまとめて述べるに止めた

い。

オホーツク文化の生業の中で特徴のひとつは漁業が生業基盤であり、オホーツク文化は漁撈文化であるということである。道北部の香深井A遺跡の例では、食料の80%以上は魚類が供給し、次に海獣類で、家畜(イヌ・カラフトブタ)と鳥類、ウニ類によってそれらを補っていると言える。また、オットセイを中心としてクジラを含む海獣狩猟は、漁撈活動の一環としての意味をもっているが、この文化で一段と発達し、海獣狩猟の技術を確立したものと思われる。この文化における海獣狩猟を含む漁撈活動の技術は、縄文・続縄文時代には困難であった利尻島や礼文島及び宗谷海峡附近での生活を安定的なものとするのができた。もっとも、続縄文文化の時代から、この地域での生活が可能であったかもしれない。しかし、オホーツク文化で達成された北海道北部での海への適応は、オホーツク文化以降も、擦文文化や中・近世のアイヌ文化に受け継がれて、北海道での生活のひとつの在り方となったのである。海獣狩猟も、北海道では縄文時代早期以降行われていたのであるが、オホーツク文化で、その船と銛の威力の上で新しい要素が加わり、それが擦文文化やアイヌ文化に受け継がれたと思われる。オホーツク文化はその後半になって、道東部でも盛んになるが、道東部では魚類への依存の程度は道北部よりも低くなり、アザラシ・オットセイ等の海獣への比重が高くなり、またエゾシカ等も盛んに捕獲するようになり、後世のアイヌ文化と変わらなくなる。また、オホーツク文化の最末期の道東部では、擦文文化の影響を受けた土器を使用する頃には、たとえばカリカリウス遺跡群の例でみられるように、サケ漁をかなり盛んに行っていたらしい。オホーツク文化の生業で最も不明な点

3. 時代毎の生業の特徴

のひとつは、オホーツク文化の終末に伴って、その生業体系が、擦文文化にどのような形で伝わったかということである。道東部では、おそらく擦文文化人の中にオホーツク文化人が吸収・同化され、その技術も擦文文化人に受け継がれたであろう。一方、道北部では、オホーツク文化と擦文文化の接触後、オホーツク文化人とその技術・生活様式は、次項で述べるようにおそらく擦文文化人の中にある程度は受け入れられたものと思われる。いずれにせよ、オホーツク文化は北海道にとって単なる異質な文化ではなく、その文化伝統は後世のアイヌ文化の中に大きく影響していると思われる。

また、生業活動の全体の推移の中で言えば、若干の交易のための生業活動があったとしても、オホーツク文化人の生業は自分の食料を確保するための生産活動であって、その点では縄文・続縄文文化と同じグループに属するものであり、擦文文化以降の北海道の文化とは一線を画すものと言うことができる。

d. 擦文文化の生業

オホーツク文化とほぼ同時代に北海道に存在したもうひとつの文化である擦文文化を担った人々の生業についてみてみよう。表1に示したように、動物遺存体でみる限りはサケ類の出土例が多く、サケ類への依存が高かったようにみえるのであり、また遺跡の立地からサケへの依存が擦文文化人の生業の特徴であったという議論が多く行われている。しかし、はたしてそうであろうか。この点について、たとえばオホーツク文化との関連で考えてみると、道北の香深井A遺跡では擦文文化の堅穴が知られており、オホーツク文化と同一の場所で、擦文人が生活していたわけであり、その擦文人の生業は何であったかが問題である。その堅穴では動物遺存体は出土していないのであるが、穀類をある程度は食べていたとしても、礼文島に堅穴住居を設けて生活していたとすれば、オホーツク文化人と同様に漁業や海獣猟を生業としていた可能性は大きいと言わねばならない。もっともオホーツク文化人との交易を主な目的として香深井A遺跡に立地したとすればまた別であるが、この想定は現在のところまだ無理な点が多いように思われる。近世の宗谷場所の設置やニシン漁の変遷からみて、礼文島近海での生活の基本は、オホーツク文化以降近代に至るまで漁業にあったとみてよいであろう。

また、道南の内浦湾の小幌洞穴A地点の資料では、オットセイの資料が多いことが特徴である。この地域は、北黄金貝塚A'地点の資料でみるように、縄文時代前期以降、オットセイを主体とした海獣猟が盛んに行われており、この地域では明治時代は

じめまでオットセイ猟の伝統が受け継がれていた。小幌洞穴の資料によって、擦文文化の時代にもオットセイ猟が盛んに行われていたことが明らかになったと言える。小幌洞穴A地点の資料でさらに注目すべきことは、オットセイの出土内容が四肢骨は少なく頭蓋の骨、特に下顎骨が多いことであり、おそらく、これらの下顎骨は儀礼的な取扱いを受けたものと思われることである。擦文文化の文化内容をオホーツク文化やアイヌ文化と比べる時、動物儀礼を明示するものが少ないのであるが、青苗貝塚の資料とともに、擦文文化においても動物に対する儀礼が行われていたことを証明するものと言えるであろう。

さて、擦文文化の生業について考える時、遺跡出土の動物遺存体が少ないということが最も大きな特徴と言わねばならない。このことは、擦文文化の生業を考える場合、もっとも困難な点であったが、逆に、この点を手がかりにするべきであろう。筆者は、擦文文化においても、おそらく、少なくとも擦文文化期以降と同程度の狩猟・漁撈・採集活動を行っていたと想定している。それにもかかわらず、竪穴の床面上のサケの焼骨を主体とした遺物しか出土しないのは、海岸部での生活が、縄文・続縄文時代のように貝塚を作るほど貝に依存しなくなったからではなかろうか。つまり、貝よりも魚への依存が高くなっていただけではなかろうか。そして、その魚への依存の背景には、オホーツク文化からの技術の移入とともに、本州からの漁撈技術の伝播、とくに網漁の技術と道具が北海道にも新たに伝わったことがあるのではなかろうか。このような技術移入は漁撈技術だけではなく、おそらく、考古学的に言えば住居の形や鉄器の出土にみられるように、生活全般にわたってみられたであろう。そして、食料としては、米を中心とした穀類が大量に入ってきたと推測される。それと同時に、おそらく、擦文人の狩猟・漁撈による産物と本州地域の人々との交易もかなり盛んに行われたものと思われる。

このように、筆者は擦文文化の遺跡で動物遺存体の出土が少なくなるのは、単なる生業の変化だけではなく、続縄文文化時代前半まではあまり影響を与えなかった本州の農耕社会が続縄文時代の後半に生活全体に大きく影響を及ぼした結果のひとつと考えている。つまり、本州において縄文から弥生へと変化した時にみられた貝塚の減少と動物遺存体の出土例の減少と同様の現象のひとつとして、続縄文文化から擦文文化への生活全体の変化を把握できるように思われるのである。

e. 中・近世

この時期の動物遺存体の出土例をみると、それ以前の擦文文化の遺跡に比べて

3. 時代毎の生業の特徴

出土量と種類が多くなることが第1の特徴である。第2は、ヒグマの出土例が擦文文化期よりも多くなり、またヒグマを含めた動物骨への儀礼的取扱いがみられることである。すなわち、民族誌的記載にみられる「アイヌ文化」の動物への儀礼を考古学的事実でも証明されることである。第3に、道南部の勝山館ではウマやネコが出土し、中・近世での本州との接触を示す明瞭な遺物が動物遺存体にも現われることである。第4に、この時期になってメカジキ漁が盛んに行われる一方、海での漁業が場所制度により、本州の商品経済の一環に完全に組み込まれたことである。すなわち、縄文・続縄文時代に行われた自分達の食料獲得のための漁業とはまったく異なった基準での漁業が行われていたことである。このような特徴は相互に関連していると同時に、すべての事象はこの当時の社会・政治的状况からみて、本州の中・近世社会との接触を考えずには語れない面を持っていると言える。そこで、ここでは、このような視点でこれらの特徴をもう少し詳しく考えてみたいと思う。

第1の特徴の動物種のバラエティーと出土量そのものの増加は、たとえば勝山館、瀬田内チャシ、遠矢第2チャシ跡等の遺跡で認められる。しかし、勝山館は文字通り和人の館であり、それらの動物遺存体を捕獲した者が誰であったとしても、本州の経済活動の影響の下での狩猟・漁撈活動であったことは間違いあるまい。またこの遺跡では、ウマとネコが出土しており、イヌを別として本州から持ち込んだ家畜として最も古い例となっている。また、瀬田内チャシの動物遺体もその種類と出土量が多いにもかかわらず、貝類ではアワビを主体とし、哺乳類ではヒグマが多い等、縄文・続縄文文化の貝塚遺跡にはみられない組成を持っている。つまり、瀬田内チャシの動物遺存体は、その当時の狩猟・漁撈活動を示してはいるが、その組成は食料の組成を示してはいないであろうと考えられることである。すなわち、動物遺存体によって示される狩猟・漁撈活動は、当時の経済活動の中で極く一部のものであり、またその活動の一部は自分の食料のためではなく、アワビの例にみられるように、交易のための商品を得るために行っていた可能性が考えられるのである。

さて、道東部の遠矢第2チャシ跡の例は、エゾシカを主体に、オットセイやメカジキ等を含む興味深いものである。チャシそのものの性格が筆者にはまだよく理解できていないのでこの遺跡の動物遺存体の意味づけを行うことはできないのであるが、エゾシカを主体とし、オットセイ、アザラシやメカジキを含む動物遺存体の組成は中・近世の遺跡でよくみられるものである。オホーツク海岸ではアザラシやオットセイを含み、道南から日高にかけての海岸部ではメカジキを出土することが多い。特にメカジキ漁は縄文文化や続縄文文化にみられないことはないが、おそらく擦文文化以降に

盛んに行われたように思われる。門別町シノタイA遺跡ではメカジキが多量に出土し、また、太平洋岸のアイヌにメカジキ漁の技法が現在まで伝わっている。また、この時代の遺跡では、ヌッチ川遺跡や桃内遺跡のように、ニシンが多く出土する遺跡のあることも特徴である。これらの遺跡は、江戸時代に盛んであったニシン漁と関連しているかもしれない。

最後に、生業活動の変遷と直接関係はないのであるが、「アイヌ文化」のイオマンテやその他の送り儀礼と中・近世の遺跡出土の動物遺存体との関連について考えてみようと思う。この時期の動物遺存体の出土状態は、瀬田内チャシや遠矢第2チャシ、シノタイA遺跡、タンネウシ貝塚等のいずれをとっても、単に捨てたとは言いがたいものである。チャシそのものから骨が出土すること自体に問題があるし、シノタイA遺跡ではメカジキの吻部が先端を下にして砂浜に突きたてて置かれていたことが知られている。また、擦文文化の時代の青苗貝塚で出土したニッポニアシカは大きな雄の頭蓋が7個まとまっていたが、オホーツク文化の骨塚出土のヒグマにみられるように、また、アイヌがヒグマの頭蓋に施すように、それらのアシカの頭蓋の後頭部には穴がつけられていた。このように、中・近世の遺跡出土の動物遺存体にみられる儀礼的取扱いはこの時代だけではなく擦文文化やオホーツク文化までたどることができるのであり、明治以降のアイヌ文化に継承しているものと言えよう。

以上に述べてきたように、中・近世の北海道の狩猟・漁撈活動をみると、その地域毎にかなりのバラエティーが認められるのであるが、そのバラエティーは、その地域毎の動物資源の内容を反映しているとしても、それ以上に、別の影響、すなわち、本州の商品経済の影響が強く現われていると言ってよいように思われる。

4. まとめ

以上、北海道の縄文時代から近世までの生業活動の変遷について、各時代毎にその特徴を考えてみた。その結果生業活動の変遷の中で最も大きな変化は、続縄文時代の後半に起こっているように推測された。すなわち、縄文時代から続縄文時代前半までは、自分の食料獲得のための狩猟・漁撈・採集経済であった。しかし、続縄文文化後半を経て擦文文化以降近世までは、狩猟・漁撈・採集活動を行いつつ、農産物をも主要な食料としたものと思われる。農産物が具体的に何であったか資料が十分ではないが、おそらく米・麦類・豆類をはじめとした多くの種類が擦文文化では利用されたのではなかろうか。もちろん、それらがすべて北海道で順調に栽培されたとは思えない。

4. ま と め

また、年代が下がるに従って、穀物利用が増えたというような状況があったかどうかは疑わしい。しかし、いずれにせよ、擦文文化以降(おそらく続縄文文化の後半以降)に穀物が食料源のひとつとして重要な役割を演じ、その結果、狩猟・漁撈・採集活動も農耕・商品経済の枠内または農耕・商品経済と併存する形で行われ、単なる自分達の食料のための狩猟・漁撈というだけではなく、交易品ないしは献上品のための狩猟・漁撈活動も行われたと思われる。そういう意味で、続縄文文化の後半から擦文文化以降の狩猟・漁撈活動は、それ以前とは別の性格を持ちつつ展開していったものと思われる。そして、おそらく、このような狩猟・漁撈文化と農耕文化の関わりの中で、「アイヌ文化」が様々な変容をとげながらも現在まで伝えられてきたのではなからうか。筆者は、「アイヌ文化」における仔グマ飼育の伝統も、農耕文化との関わりがあるのではないかと考えている。すなわち家畜飼育の技術と飼料としての穀物の存在が仔グマ飼育を促した要素のひとつではないかと考えている。このように、狩猟・漁撈経済から農耕・商品経済への転換は、北海道ではそれらが文字通りにすべての要素が転換したわけではないにしても、経済活動の変化に止まらず北海道の文化全体へ大きな影響を及ぼしていると思われる。

おわりに

北海道における生業活動について、特に狩猟・漁撈活動の変遷について、動物遺存体の資料を中心に考えてきた。遺跡から出土する動物遺存体は、その出土内容の構成が直接的に当時の狩猟・漁撈の実体を反映しているわけではない。したがって、動物遺存体の評価は他の考古学上の遺物と同様に困難な面を多く持っている。ここでは、これまで知られた資料を提示するとともに、現時点での筆者の解釈を大雑把にまとめてみたわけである。

北海道における生業活動に対する視点には様々なものがあるであろう。筆者ははじめに述べたように北海道と本州との関係、換言すれば狩猟・漁撈活動と農耕との関係に注目して議論を進めてみた。北海道では続縄文文化の頃に、新しい農耕文化に接したはずである。それが、約2000年後の明治政府による国家権力を背景とした北海道開拓によって、農耕・牧畜がそれまで以上に強力に押し進められるまで、狩猟・漁撈経済と農耕経済が様々な軋轢を起こしつつ接触しつづけたわけである。このような観点に立って北海道における経済活動を考える時、本論ですでに述べたように、擦文文化の生業についても一定の解釈を持つことができた。擦文文化の遺跡から動物遺存体が

ほとんど出土せず、サケに関する議論の他はあまり積極的な議論はなかったのであるが、出土例が少ないことを逆に積極的に解釈すべきであったと反省している次第である。本論においては、北海道の生業活動の変遷を本州の経済活動との対比で極く簡単に述べただけである。各時代、各文化毎にもう少し詳しく検討すべき点も多く、今後の課題としたい。

註

- (1) 西本豊弘「北海道の縄文・統縄文文化の狩猟と漁撈」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集, 1984年
- (2) 金子浩昌「栄浦第二, 4, 7, 8, 11, 12号堅穴に伴う動物遺骸の概要」東京大学文学部考古学研究室編『常呂』東京大学文学部, 1972年。
- (3) 注(1)と同じ
- (4) 名取武光「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』第3輯, 1940年
- (5) 小幌洞穴A地点のオットセイの年齢構成は、推計最小個体数でみると、雌雄の幼獣245個体, 雄若獣1個体, 雌成獣5個体であった。
- (6) 犬飼哲夫・森 樊須「北海道アイヌのアザラシ及びオットセイ狩り」『北方文化研究報告』第11輯, 1956年
- (7) 林善茂『アイヌの農耕文化』慶友社, 1969年
- (8) 山田吾郎「擦文農耕の起源」『歴史公論』第103号, 1984年
- (9) 吉崎昌一「炭化米が語る千百年前の北海道」『科学朝日』第43巻3号, 1983年
- (10) 加藤晋平「北方農耕覚え書10」『どるめん』第26号, 1980年
- (11) 注(1)と同じ
- (12) 札幌市教育委員会の上野秀一氏より、札幌市 K135 遺跡では「後北C 2—D式」土器に伴って「弥生式」系土器が出土したという教示をいただいた。その「弥生式」系土器とそれに伴う玉や石斧は、その図と写真を見た杉山晋作氏の所見では、関東地方の弥生文化後期にみられるセットとほぼ同じであるという。
- (13) 西本豊弘「オホーツク文化の生業」『北海道の研究2』清文堂, 1984年

第1表に示した遺跡の引用文献

- No.1 大場利夫・大井晴男編『香深井遺跡上・下』東京大学出版会, 1976・81年
- 2 岡田敦子他『亦稚貝塚』利尻町教育委員会, 1978年
- 3 大場利夫・大井晴男編『オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会, 1974年
- 4 佐藤忠雄他『稚内・宗谷の遺跡』稚内市教育委員会, 1964年
- 5 筆者分類, 報告書準備中
- 6 東京大学文学部考古学研究室編『常呂』東京大学文学部, 1972年
- 7 駒井和愛編『オホーツク海沿岸知床半島の遺跡下』東京大学文学部, 1964年
- 8 右代啓視・西本豊弘「網走市能取西岸遺跡について」『北海道考古学』第19輯, 1983年
- 9 野村崇他『ニツ岩』北海道開拓記念館, 1982年
- 10 直良信夫「北海道網走町最寄貝塚の自然遺物」『古代文化』第13巻第12号1942年
- 11 文献注(6)と同じ。
- 12 文献注(6)と同じ。
- 13 羅臼町教育委員会『羅臼』羅臼町, 1971年
- 14 湧坂周一他『松法川北岸遺跡』羅臼町教育委員会, 1984年
- 15 八幡一郎編『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会, 1966年

- 16 北構保男・須見洋「北海道根室半島トーサムボロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』第24号, 1953年
- 17 国分直一他編『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部, 1974年
- 18 佐藤隆広他『ウエンナイ2遺跡』枝幸町教育委員会, 1983年
- 19 金盛典夫他『須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会, 1981年
- 20 福田光明他『伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書』標津町教育委員会, 1982年
- 21 宮宏明他『開成4遺跡』北見市, 1982年
- 22 横山英介他『北大構内の遺跡3』北海道大学, 1984年
- 23 斎藤傑他『錦町5遺跡』旭川市教育委員会, 1984年
- 24 宮塚義人他『おびらたかさご』小平町教育委員会, 1983年
- 25 桜井清彦「北海道奥尻島青苗貝塚について(第一次調査概報)」『古代』第27号, 1958年
なお、ニホンアシカの同定は筆者による。
- 26 金子浩昌・筆者が同定。未発表。大場利夫先生の御好意により分類。報告は北大解剖学教室調査団「小幌洞穴」『北方文化研究報告』第18輯, 1963年
- 27 松崎水穂他『上之国勝山館跡Ⅲ・Ⅳ』上ノ国町教育委員会, 1982・83年
- 28 峰山巖編『瀬田内チャン跡遺跡発掘調査報告書』瀬棚町教育委員会, 1980年
- 29 四手井晴子「北海道観音洞窟発掘経過報告」『先史学研究』第2号, 1960年
- 30 峰山巖「ヌッチ川遺跡」余市町教育委員会・余市町郷土研究会, 1959年
- 31 峰山巖他『天内山』余市町教育委員会, 1971年
- 32 名取武光・松下亘「桃内遺跡」『北方文化研究報告』第19輯, 1964年
- 33 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部, 1980年
- 34 金盛典夫・西本豊弘「斜里町タンネウシ貝塚採集品」『北海道史研究』第7号, 1975年
- 35 福田友之他『遠矢第2チャン跡発掘調査報告書』北海道教育委員会, 1975年
- 36 高橋和樹他『遠矢8遺跡』北海道教育委員会, 1981年
- 37 山本文男他『音別町ノトロ岬遺跡』音別町教育委員会, 1984年
- 38 筆者の分類による。報告書印刷中。
- 39 長沼孝他『白老仙台藩陣屋跡Ⅰ』白老町教育委員会, 1982年
- 40 内山真澄他『寿都町陣屋遺跡発掘調査報告書』寿都町教育委員会, 1980年

(本館 考古研究部)